

蘭ミュージアム・高森

～副園長奮闘記～

小林 重信

縁は奇なもの押されるもの

蘭ミュージアム・高森は、平成14年11月に開園、南アルプスを望む伊那谷の南西部に位置する風光明媚で俗世界から遊離したような場所にひっそりとたたずみ、多くのランの原種を保有・展示する世界的に名を馳せた小さくても中身の濃い植物園です。

私儀

平成15年10月16日、36年間奉職した海上自衛官を退職しました。それまでのしがらみ、階級すべてをかなぐり捨て、飛行機の整備から植物の管理へと……。

定年数年前、さて定年後はと思案していたところ、趣味で栽培していたランをなんとか仕事の一つの選択肢として考える必要性に迫られ、金物屋が生物屋になるには手っ取り早く学校だと、在職中にもかかわらず、園芸別科に入学。仕事、単位、1000属に追われる。

無事自衛官として「帽振れ」（帽子を振る別れの儀式＝海上自衛隊用語）が済み、別科の学生としてやっとこれで学業に専念できると思っていた矢先。忘れもしません。平成16年3月31日夜10時、「植物園から誘い

があります」。

えっ！ 何のことか？ 寝耳に水！……被扶養者としては大蔵大臣に相談。一言、「簡単に花屋なんかできないんだから、行けば…」と背中を押され、この年の6月から、再び高森での単身赴任生活（自衛官として勤務する内、結婚後半分以上が単身赴任）が始まりました。

当初、栽培担当の職員として採用され、300坪の栽培温室の維持管理に朝から晩までランと向き合い、植物と気持ちも通じ合えてきたような感じがしました。そして、18年4月、前園長の退職に伴い唐澤名誉園長が再び園長として返り咲き、その補佐として私が、副園長として勤務するようになりました。

蘭ミュージアム・高森の生い立ち

園長唐澤耕司博士が沖縄在住の折、地元信州に終の棲家を求め、この伊那谷に生活の拠点を持って来ることと、「ラン栽培の好適地」を探索。高森町との接点ができ、「教育・文化」の振興を目的とした植物園の設置に共鳴され、当地に「蘭植物園」の開園の一助を担うこととなりました。そして約300属1000種に及ぶラン科植物の原種を寄贈されました。

当地に植物園を設置するための条件として、世界中のラン科植物が、一カ所で可能な限り容易に生息できる条件等を享受できる場所として選択されたようです。特に、当地は、夏場の最低温度が20℃を下回ることで、及び冬季における日照率が高いことです。人間が生活するうえで快適な条件が、植物にとっても最適であることが理解できます。

設置のコンセプトは、教育文化施設として、また町の将来の基幹産業となり得る事業として位置づけ、スタートしました。特に、地元産業振興（ラン栽培農家の誘致、当園周囲の開発等）、観光、研究開発業務（新品種の創出）に重点を置いて計画されました。



「帽振れ」にて 後姿で、帽子を挙げているのが私

平成14年11月3日開園。

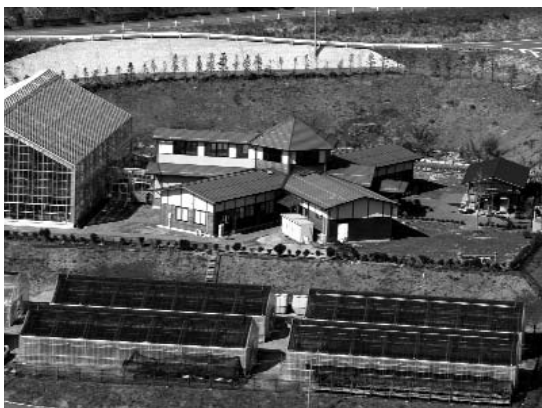
植物園の現状

植物園は、「町づくり振興公社」が運営する形をとっています。写真でもわかるように、2階建ての部分が入舎で放射状に建物が分岐し、それぞれが事務所、展示室、研修室、研究室となっており、出入口口及び鑑賞温室への進入路を加えると6辺、ランの花をモチーフに形作られています。2階部分は、展望喫茶コーナー、門近くの平屋建ての部分は蘭ショップとして、ラン及び様々な植物を販売（現在個人事業）しています。そして黒い遮光ネットに覆われた部分が栽培温室です。

この施設を管理・運営する人員は、園長、副園長、事務次長、研究員、及び臨時職員4名、午前のみパート職員4名の構成です。

このため副園長の仕事は多岐を極め、予算要求、行事企画・調整、お客様の誘導・案内、植物の展示・配置替え等、その他、草刈、便所掃除と、孤軍奮闘で園内を走り回っています。また、自衛官として勤務してきたノウハウが生きてと思いきや、なかなか「頭西むきゃ尾は東」が「頭も尻尾も西」。難しさを痛感している次第です（愚痴ではありません。楽しんでます）。その分、一段と若返ってきている自分を見つけることが出来ます。悪循環の典型ですね。

開園当初から、「小回りが利く」植物園を目指し、2回/月の展示入替、及び1回/月程度のイベントを開催しています。また、各地のラン展等へ出展（年間3回程度）し、園の存在をアピールしています。その効果は、来園者の方の「ラン展で見ました」という一

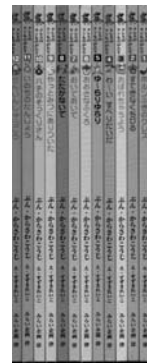


園の全景の航空写真

言で知ることができ、職員の勤務意欲向上に貢献しています。

教育の一環として、開園当初から、学校等への出前講座を開催しています。内容はランの生態、無菌播種等についての話、校外教育として当園で実習するような形態をとっています。

また低学年及び保育園児に対しては、ランに関心を持ってもらい、植物から「命の大切さ・素晴らしさ」を知ってもらうこととしています。特に、園長が執筆した絵本『クレスのランものがたり』を題材に、様々な企画が催され、園でもその一助を担っています。



3年前から通年で実施するランの栽培教室を2コース、バイオ集中講座（無菌播種）を開催しています。これはランの趣味家の底辺拡大を狙い開講したもので、18年度には栽培教室に30名の方が参加しました。また、近郷の趣味家によるウチョウランの栽培教室を継続的に開催していただき、好評を博しています。

最近、ランに対する興味か、当園が知れ渡ってきたのか、定かではありませんが、研修が増加傾向にあることです。中学生の職場体験、長野県の高校教諭の技術研修、家庭園芸普及協会（東京）等の研修があり、また海外からの栽培研修（1年間）要望があり、その対応に追われているのが現状です。

このように年間行事は盛りだくさんですが、陣容が満足できるものではなく、それなりの成果しか挙げていないのではないかと懸念されます。

年間の当園の入園者数は、18年度37,000人を数えましたが、一般入園者とバス等の観光会社経由で来園される方の比率が、半々となっています。この施設で入園者が多いとよく言われることですが、年間平均して



クレスと遊ぶ親子

いる入園者ではなく、当地名産の「市田柿」の展示期間の11月1ヵ月間の入園者が約2割近くを占めていることにあります。このような施設では、観光バスに頼ることなくリピータを増やすことが優先されるべきと思われませんが、「背に腹はかえられぬ」の言葉どおり、入園料の減額等を甘んじて受け入れ、入園者数の確保に苦慮しなければならないのが現状です。

地域のラン生産者から受注し、フラスコ苗の生産もしています。これも当初からの計画であり、施設は脆弱ながら設備が充実していることから、昨年度から少しずつ生産者以外の趣味家（全国）からの依頼を受け、生産しています。

植物の維持・管理については、「原種のランの維

持・管理及び展示」「見せるためのラン」の栽培に心がけ、鉢物及び着生（コルク、ヘゴ板、石板等）は主として栽培温室で行っています。

また、自然状態ではランがどのような状態で生息しているのかを展示するために、鑑賞温室の樹木に着生させたり、生息できる環境条件を検討し、少しずつ直接植え込んでいます。特に、水の流れの中で生育できるものについては、良い結果を得ています。

また、屋外における栽培については、日本固有種が当地の-10℃にも耐えられるラン科植物（セッコク等）を着生させ、開花できる状態になってきています。道路際の荒地に植え込んだシランが今年の春から開花し始め、荒地に彩を添えています。管理が非常に大変で一寸目を離すと雑草がすぐシランの丈を追い越してしまいます。

ラン以外の植物について。約5年が経過したことで樹木が鑑賞温室内で十分繁茂し、木陰ができ、夏でも涼しい環境を作り出しています。中でも“高森産”熱帯果樹の人気は高く、バナナ、パパイヤ、マンゴーと、収穫を楽しみに来園される方もあり、完熟状態で試食していただき、好評を博しています。人間の本性をくすぐるワンポイントではないかと感じています。特にバナナが完熟すると、町内の保育園児が、天気の良い日には延々4kmの道を歩いて登って来て、美味しそう

に食べて帰ります。順次、熱帯果樹の樹木を植え込んでいますが、収穫までには時間がかかりそうです。

そのほかには、ガジュマルの幹の皮やバナナの葉等を利用して草木染の講習会も実施しています。今後は、このようなラン以外の2次的なイベントを多く企画していく必要があります。草木染は回数を重ねるごとに参加者が増加する傾向にあります。

植物園事情

高森町町民数は約13,000人、年間予算が約47億円です。当施設は年間維持費が人件費を



ジャングル化した鑑賞温室園内

加えて約6,000万円。入園料と差し引きして、町の予算から約4,800万円の持ち出しとなり、町民数から考えると大きな負担に見えます。しかし、この金額は町の年間予算の1～2%。でも数字だけ見ると大きく感じるものと思われます。

がしかし、この施設の魅力、及び文化的価値等は、町民の皆さんが「自分の故郷にはこんな植物園があるに！」と自負できる施設であると思えます。維持・存続する方法を見出せないものかと感じます。この持ち出しが適切か否かは、町民の皆様が判断することにはなりません（300万円の赤字で閉鎖した植物園があると聞き及びます）。

18年7月「蘭植物園検討委員会」が発足。現町長の選挙公約が検討委員会の設置でした。この委員会は9回の会合を重ね、19年4月答申が町へ出されました。

その後、町ではこの検討委員会の答申内容（委員会の答申を提示、町としての方針は示されず）について町民説明会を各地区で開催し、町民の意見を聴取しました。その結果、ほとんどの会場で廃止論が多く出されました。行き着くところは、町の負担額の大きさにありました。私は植物園の代表としてこの町民説明会に参加し、町民の意見を聞きました。いや聞かされました。出てくるのが、「数字の一人歩き」。文化・教育より福祉という意見が大半を占めていました。このような場に出てくる人は反対派（植物園に近い説明会では、賛成派）が主流で、ここでの意見を総意とすべきか否かは、今後の進捗状況により判断できるものと思われる。

なお、検討委員会の答申内容は、短期的、中長期的に目標を定め、様々な方法でアプローチし、改善を図るというものでした。現状では、この答申内容につい

での検討及び動きは全くないことだけを述べさせていただきます。

町民の中でも見識のある方は、町にとってかけがえない施設であることを認識しているようですが、その動きが全く見られません。この根底にあるものが何なのか私には理解できません。

おわりに

当園の副園長として約1年6ヵ月が経過しようとしています。植物園の内部事情をつづって感じてきたことは、「5年間で結論を出すのは早急ではないか」ということです。知名度がやっと上り調子になってきたように感じている今日この頃、少なくとも10年間見ていただければ、町民の皆さんに認知してもらうことができ、道が開けてきたのではないかと痛感しています。

この秋には、指定管理者制度が適用され、管理者が公募されます。平成20年度から民間活力の導入か、または現状と同様に振興公社が引き受けることになるか、年内には決定されることと思われます。当園のように他にない特徴を持った植物園が、民間活力導入により、本来の主旨から逸脱していくことは、自明の理であると思われます。この風光明媚な場所に立つ一つの文化が消滅することが、懸念されます。

背中を押されて間もなく3年半、後1年半で第2の人生に終止符を打つことになりそうです。さて第3の人生はと思うと、また夢が膨らんでいきます。そして、金物屋に戻ることなく、いつかまた「花葉」に投稿できるような職についていることを祈願し、とんでもない夢を見て行きたいと考えています。

「ま～だ、これから！」



花と緑のある暮らしのお手伝い

● 地方卸売市場
九州日観植物株式会社
代表取締役社長 西川 勲

〒818 0013 福岡県筑紫野市大字岡田310-1
PHONE (092)926 1238(代表) FAX (092)926-5984